

千種むかしむかし

千種むかしむかし

はじめに

千種町が生れてから、今年でちょうど二十年になるという。だがそれは行政上の名前を変えたただけのことで、前にも千種村はあった。その前も、まだ前にも村があった。

この千種の山野に人影一つみえなかつた時代はいつなのか、と村の歴史を逆にたどっていくことは、山を登るとき、背丈より高いスズコワラを掻き分けながら頂上をめざすように、苦しんどい仕事である。

ちくさの名が文字に書かれて残っている最も古いものは、今から千二百年ほど前の和銅年間に書かれたとされる「播磨国風土記」である。

そこまで、さかのぼる途中の時代でも、比較的くわしく調べられた時代もあれば、かきもく見当さえない時代もある。

「町史が発刊されたら、その辺のことも理解してもらえらるが、今は大昔のちくさのことを、想像や独断をまじえながら簡単に雑談風にのべていくことにする。

将来、千種の郷土史研究を進展させる上で最も大切な資料として「埋蔵文化財」がある。たとえば大寺とか観音田という地名の元となっている「大寺廃寺」にしても、記録されたものは何一つ残ってはいないが、あのあたりを掘ってみれば、寺域や建てられた年代、あるいは廃寺になった年代までわかるかも知れない。また歴史小説的な興味からいわれている「長水城主宇野政頼が秀吉方に首をとられるのをさけるために、大寺に放火して、その炎の中で切腹したに相違ない」という空想にも、はっきりした答えとなつてもどつてくるはずである。

新宮から観音寺の下へ、あたらしく道路を通すことが検討されているらしい。このあたりがちくさの文化的中心地だった時代もあるので、工事中に大切な「遺跡」がこわされる運命にあると考えると、今のうちにくわしく調べておく必要があるが、残念なことに「文化財保護法」が制定されてから「考古学」の主導権は文化庁の役人のものとなり、以前のように民間による自由な研究ができなくなったので、それも容易ではない。

また工事中に「埋蔵文化財」を発見した土木業者は、すぐさま文化庁に報告し、何分の沙汰があるまで工事を中止して、待たねばならぬ義務があるのだが、工事を中断して待つ間の事業上の損失を保償してもらおう権利はない。もし工事中に「遺物」を発見しても気付かなかつたふりをして、土木工事を終えてし

まうこともあるのではないかとという心配がある。

千種の場合町長職権の許す範囲で「かわりの仕事を与えてやるから必ず報告するように」とでもいう解決策をとってほしい。

業者の方へのお願いとしては、文化財保護法だとか、県の命令など、上からの押付けと受取らず、千種の歴史研究を進展させるための一つの鍵を、土木業者が握っているのだという自負と、遺跡を闇に葬ることが千種にとってどのような損失となるかわからない、という自覚によつて、すみやかに発見届をしてほしい。なぜすみやかでなければならぬかというと、普通の場合合われわれの目につくのは、遺跡でも「遺構」でもなく遺物なのであるが、仮に一つのジゲを遺跡の単位と考えれば、家・井戸・道路などが遺構で、そこで使っていた道具だとか、食物、人や獣の骨など、手に持てるようなものを遺物と考えてよいのだから、遺物が見つかった時は、もうその遺跡の中にいて、遺跡や遺構は、こわされかかっていると思わねばならないからである。

前にも「兵庫のふるさと散歩」という本に千種のことを書いたので、すでに御承知の方もあると思うが、あの略地図にある「縄文式文化」の遺跡は、西播地方でもその数は少なく、まして千種川流域となると千種町だけ、といつてもよいほど貴重な

遺跡なのである。

また「弥生式文化」の時代か、それに次ぐ「古墳文化」の時代に、この千種で製鉄をしていたという証明ができれば、日本で有数の鉄の先進地だったと郷土自慢ができるのである。

一見植木鉢のメゲのような何の変哲もない土器のかけらが、千種の歴史にとって大変重要な役割を持っているかも知れないのに、見過しにされている場合が多い。

畑を耕していたり、道の切り通しなど土がむき出しになっている所で遺物を拾うのを「表面採取」といつて、考古学の基礎的な大事な仕事でもあり、誰にでもできる学問参加である。

私が働いている工事現場では、女の人達にさえ、そのことがよく理解されていて、ちよつと変った土器片などをみると、私の所にもつて来るが、ときには土管のかけらだったりして大笑いすることもある。

表面採取をしたときは、先ずその場所についてなるべく詳しく覚えておき、簡単に水洗いして泥だけおとした遺物を、教育委員会に届けてもらえば、検討した上で、発見者の名前をつけて資料室に保管、展示されることになる。

また千種のむかしに興味を持たれる人は、遺跡発掘などの機会には遠慮せず見学し、質問すれば、調査団から親切に説明してくれるはずである。ただ発掘された場所や遺物などを、勝手

にさわったりして調査のじやまにならぬだけの注意は必要である。

日本人の源流

地球ができてから四十五億年になり、人類が生れてからでも百万年以上になるというが、この千種に人が住むようになったのは、どのような道すじをたどってであろうか。

今から四、五十万年前、東南アジアのジャワ島あたりが東洋人の発祥の地だと考えられている。それが、ながい間にアジア大陸にひろがり、狩や、草木など自然のものをとることで生きていたと思われる。日本列島も、ながい間にはある時期は大陸とつながっていたり、切り離されて島になったり、時には海の底にしずんだりという変化をくり返してきた。

それと共に、気象的にも暑くなったり寒くなったりしていたことが、化石の研究によって証明されている。山の上に海の動物の化石、反対に海の底から陸上動物の化石がでたりして、地形変化の様子が知られる。その上に、ある時期にはシベリアあたりにはすむ鹿のなかまのオオツノジカやヘラジカの化石があったり、別の時期には熱帯地方にすむワニ、スイギュウ、サイなどの化石もあって気象変化を証明している。

これらの動物たちは、日本が大陸とつながっていた時期に移って来たのだから、狩のため、その動物を追って来た人々にし

ても、ある時期には北方のシベリア方面からやって来ただろうし、別の時期には南方の東南アジア系の人種が日本に来たと考えられ、日本人の先祖といっても一様ではない。日本人の生活の痕跡は今のところ七万年ほど前まで追跡されているということである。

日本と大陸とが陸続きだった最後の時期は今から二万年ほど前、ウルム亜氷期といわれ、大変寒い時期で北方系の獣たちが栄えていたのだが一万数千年前から暖かくなりはじめ、大陸と切り離されて、ほぼ今の形におちついたのだといわれる。

槍と棍棒の文化

人間が他の動物とちがうところは、火を使用するとか、道具を使うことだといわれているが、この頃までの日本人はまだ弓矢を使うすべも知らず、粘土を焼いて土器を作る知恵もなかったと考えられており、「旧石器時代」とか「無土器時代」とよばれていた。

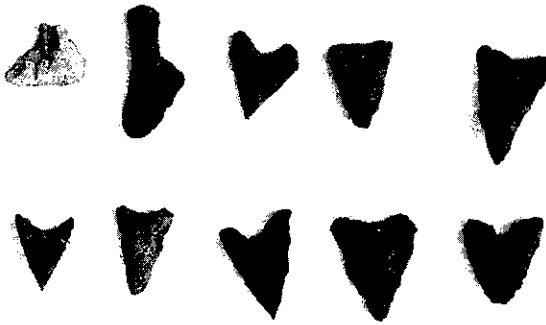
大正時代の終り頃から、この頃の石器は日本のところどころで見つけられていたのだが誰も注意していなかった。

豆腐行商のかたわら考古学の勉強をしていた相沢忠洋という学問好きな青年が、群馬県の岩宿という所で、赤土の中に、全く土器を伴わず石器だけを含む地層があることに注目したの

千種むかしむかし



町内より出土の石器 (役場資料室保管)



縄文式土器片 (役場資料室保管)

は昭和二十四年のことで、それが日本の「無土器時代」研究の
 出発点となった。

千種ではまだ赤土の中から石器をみつけた人がないので、今
 のところ縄文時代より前の千種に、人が住んでいたとは言え
 ないが、「洪積世」の土層に注意深い目を向けることを、おこた
 ってはならないだろう。

土器を作ることを知らぬ時代の人たちが、容器には何を使っ
 たものだろう、中味をとり除いて干しておけば水を入れること
 のできるカンピョウなどや、獣の皮を丸はぎにした皮袋などが
 使われていた可能性は強い。その他にも草のツトや、縄を編ん
 で作った袋(コイズ)のようなものも使用したと考えられる。

狩と漁の文化

この時代を「新石器時代」とか「縄文式文化の時代」といって、
 前の無土器時代や、次に来る鉄や銅も併用した弥生式文化の時
 代と区別している。

「縄文式土器」が最初に作られた時期については、専門家の
 間でもいろいろな意見がある。

最も古く見る人は一万二千年ぐらいだといひ、最も近く見る
 人は六千年ほどに過ぎないと大きなくいちがいを見せている。

ここでは難しい理屈はぬきにして、八千年から一万年ほど前
 だと大まかに考えておこう。縄文土器というのはムシロカナワ
 のような文様が^{もんよう}ついていている土器のことで、それと同じ時期に作
 られた文様のちがう土器を一しよにして縄文式土器という。

アジア大陸と切り離されて、久しく孤立したような日本列島に、大陸とほぼ同じ時期に土器を作る技術があることは偶然なのか、誰かが海を渡って来てその技術を伝えたのかは知らないが、土をこねて火で焼けば硬い容器ができる、ということを考えてのは大した発明である。

千種で一番古い土器は昭和四十六年に私が三室スキー場の跡でみつけたもので、縄文前期、今から四千五百年前だと、神戸新聞にも報導されたので御存知の方も多いだろう。人によっては縄文早期で五千年より前のものだともいうが、とにかく四、五千年ほど前にこの土器を使った人が三室に住んでいたことだけはまちがいない事実である。

縄文早期、前期の遺跡をみると、県内では但馬の山間部に一ばん多く、全国的にみれば、雪が多く、標高もたかくて住みにくいはずの東北地方や、長野県あたりに、数多くみられるのはふしぎな現象で「縄文人の山棲み性」というのである。

この人達のかつてのふるさとを暗示するものかなど単純な想像をすると、中期以後、急に高原性の住居がおとろえて、海に近い台地などに貝塚を伴なう遺跡が多くなることについての説明がつかない。しかし縄文の文化形式が北東アジア（シベリア）などと共通点を持つことだけは事実である。彼等が平野部よりも高原性の土地を選んだ理由の第一は狩をするのに好都合であったということであろう。雨で増水し、流れも速くなった大河

を渡ることは不可能に近く、また背丈より高いアシなどの生える低湿地は見通しが悪く、狩をするにも不利だし、また万一敵におそわれた時にも守りにくい。その点高原性の土地なら尾根ぞいに歩けばヤブも浅いし、シシやシカの踏みわけた「けものみち」は往来にも狩にも好都合であった。

その上最も興味のあることは縄文早、前期にあたる頃（今から八千年～四千年前）の気象条件である。「花粉分析」という方法で調べた結果、今より二度ほど気温が高かったことが証明されている。数字の上ではたった二度の差であるが、この二度の持つ意味は実に大きいのである。

現在、アラカシという樫の木は下河野の小坂をほぼ上限とし、ツバキは河内のサイノタワあたりをほぼ上限としている。アラカシ、ツバキ、ウバメガシ、ヤマモモなどは、日本の暖地性常緑樹林の代表的な樹種である。このような林相を「照葉樹林」といって瀬戸内海沿岸の、平野部の林相である。気温は、単純に言えば二百メートル高くなるごとに一度さがる。二度高温だった縄文前期には、いま海岸部にある照葉樹林が四百メートルの高さにまで拡がっていたということになる、その頃の名残が、先にいった小坂やサイノタワにみられるということである。

千種で四百メートルの点を拾ってみると、西山の岩吹、岩野辺の小河野、河内の出合、下鷹巣などであるから、今ある部落の大部分が、縄文前期には照葉樹林に覆われていたことになる。

斜面の向きとか風の強さ、土質など複雑な条件もあるから相当割引きして考える必要があるだろうが、少なくとも下河野、七野、室、黒土や西山、千草の一部は此の樹林帯にあつたと思われる。薄暗くてジメジメした林の中には、ヤブカ、ツツガムシその他の毒虫や、山蛭なども多く、人が住むには適していなかっただろう。

あかるくて湿気の少ない落葉樹林のほうが、動物にとつても、人にとつても、住み心地がよかつたにちがいない。縄文早、前期の人が高地に住んだ理由には、そういう事情があつたのだから。

千種の縄文遺跡が北の方にばかり偏^{かたよ}っているのも、それを反映していると考えられる。

四千年前から千五百年前という、縄文中期以後にあたるが、この頃は逆に今より二度ばかり寒かつたといわれている。今よりも二度低温であれば、林相がどう変わるかを想定してみよう。

現在、ブナの下限は西河内の金谷あたりであり海拔六百メートル地点で、それ以下ではみかけない。ブナ林は約八百メートル以上であるから、前にいったように二百メートルごとに一度差があると考えれば、海拔四百メートルの所にまでブナ林があつたはずで、ホオヤトチは瀬戸内海沿岸までさがつていただろうと考えられ、県下全域が「温帯性落葉樹林」に覆われていたことになる。

縄文中期の時代に高原性住居がさびれ、海岸部の遺跡が急増することは、差引四度低温の冬の生活事情が大きく作用しているといえよう。そしてやがて来る弥生時代の文化的急変への遠因は、この時代の人々の海に出て漁^{うしほ}をすることが、山で獸を狩ることよりも主要な日常生活に変わっていったことにあるだろう。

縄文時代前半の人たちは、狩が最も重要な生活手段であつたから、今の人間がしているような定着した生活ではなかつた。短かい時は半年か一年で住居を変えることもあつただろうし、条件さえよければ二代、三代続けて住んだかも知れないが、先祖代々同じ村に住むようになったのは弥生時代から後のことで、農地という固定した財産にしばらくつげられるようになったことによる。

また少しばかり話題がそれるが、千種の縄文時代について論議するきっかけを作つたのは、この私でもなければ中学校の歴史研究班の先生でもない。

たまたまブルドーザーの運転中に見なれぬ土器片があることに注目した矢内加年夫さんなのである。彼が未知に対する興味を示さぬ平凡な運転手であつたら、千種の縄文時代の研究はもつと遅れていたに相違ない。その発見を偶然などという安易な言葉で片付けず、発見者には敬意を示さねばならない。

その時の土器片は専門家によって、様式や年代の決定がなされてきているが、そのほうの記述は「町史」にゆずる。

縄文時代の人々はどのような家に住んでいたのだろうか。年配の人たちはイヌツクバイという小屋組を記憶しておられるだろうが、あれより少しましな小屋だったと考えればまちがいはない。地面をちよつと掘り下げてそこに家を建てることから「堅穴式住居」という名前がつけられている。千種では完全に発掘された遺跡がないので何軒でムラをつくっていたか不明であるが、普通五、六軒から十数軒までで、半円形に小屋が並び、中央に広場があつて、集会場、作業場などの性格を持っている。山の神や地の神に対する祭りだとか、病気のまじないなどにも使用されたことだろう。

食糧はドングリ類や山菜類を主として、タニシ、カワニナ、テツポウ虫類、イナゴ類、ハチノコ、川魚などは女、子供にも、とることのできる動物性食品であり、イノシシ、シカ、サル、キツネなどの大形獣は男たちの領分で、獲物は村の人たちに平等に分配されたことから「原始共産の時代」ともいわれる。

三室や空山そらやまの縄文人にとって、日本海から産卵のためにのぼってくる中江川の、サケやマスは、秋の食糧として味の上からも、量の上でも大きな比重をもっていたと想像される。

縄文中期のころから、農業のハシリと考えられる生活がはじまった。おそらく最初は特別大きい実のなるクリの木を大事にしたり、ムラの泉のそばに生えたクルミの苗木を保護したり、

子供達がペットとして飼っていたウサギが仔を産んで増えていくことにヒントを得て家畜化したりというようなことから、後には進んで物を作るといふように変つていったといわれている。カリオという名前が最近まで行なわれていた焼畑農法はイネより先に日本に入つて来たとおもわれる。ヒガンバナという草も揚子江より南の中国（南支那）あたりの雑草であつたが、球根からたやすく澱粉をとることができるので、食用植物として持ち込まれたのではないかという説がある。その後、よりよい作物ができると、澱粉は容易にとり出せても、毒性が強くて水さらしの手段がめんどうだという理由で次第に忘れられ、雑草化していった。

最近まで四国の一部では「シレイモチ」というものを作つて食つたといわれる。シレイというのは千種でいうシブネのことである。伊豆の八丈島では、毒性の強いテンナンショウさえ毒をぬいて「ヘンゴダンゴ」というものにして食つたというが、これらは原始、古代から生きて来た慣習だと考えられる。

大形獣をとるための「オス」や小形の獣や、鳥をとる「ワナ」、魚をとる「サガリ」なども、この時代から生き続けた技術ではなからうか。

鉄と稲の文化

この時代をいいあらわす弥生式という名前は、東京の弥生町

遺跡で発見された土器が、縄文式土器とは別の時代の遺物であるということから名付けられたものである。それまで使用されていた縄文式土器が急速に姿を消し、弥生式土器が作られるようになったのは今から二千二、三百年前のことである。その普及の早さは謎とされているが、ちょうどその頃大陸の国々は動乱期だったので、戦乱を逃れた大勢の人達が新しい文化をもつて、入り込んできたのだという学者もある。

新しい文化は、弥生式土器だけでなく、鉄の利器、青銅器、水稻の栽培などがあげられるが、そのことは総括論であり、具体的には稲が縄文時代の終りごろ、九州の一部で栽培されていたことは、モミ跡のついた縄文式土器などによって証明されている。

縄文人の狩と漁撈の生活は、あたらしく移住して来た稲作民族の利用する土地とは異質であったから、利害の対立も、余計なまさつを生じることもなく、しかもこの異質な生活文化にあらがれた縄文人が、素朴な稲作技術を身につけ新文化に同化することは、たやすいことであった。

青銅や鉄器は輸入にたよっていたため、貴重品で全国、全階層に普及するまでには相当の年月を要し、従来の石器使用が主で「金石併用」といえる時代がながく続いた。文字通り青銅器、鉄器時代といえるような農具などにまで鉄を使用する時期といえば弥生後期ではあるまいか。

日本で砂鉄から鉄がとれるようになったのはずっと後のことで古墳時代も終りに近い六世紀前後（今から千三、四百年前）ではないかといわれている。

千種の場合、弥生式土器と共に鉄器、青銅器が出土した例を知らないが、菅野では「銅鐸」が発見されている。銅鐸というのは農の神を祀る時の祭器だといわれ、今の近畿、四国、中国地方がその主な文化圏で、中部地方も一部ふくまれていて、九州を中心とする銅剣文化と対比して考えられるのが普通であるが、私にとつてもっと興味深いのは弥生時代後半に発生した鏡を「依り代よしろ」とする天の神信仰である。

銅鐸、銅剣と祭器がちがいで、直接祀る神様はちがうにせよ、根本的には同じ地の神信仰であり、縄文時代から続いていた信仰形態とも共通性のあるものだったが、天の神（日輪）信仰は、いわば新興宗教である。どの国から、如何なる集団によつてもたらされたものであろうか。そしてそれが今日では、仏教など外来の宗教と区別して、日本の固有信仰だといわれる神道にながるものなのである。

銅鐸のことからつい横道にそれてしまったが、千種の弥生式土器散布地は縄文時代のそれと比べて、十倍以上にも増えている。西河内の木地山から、三河の河崎まで散布範囲も広がっているが、人口もそれに比例して増加したかという点、決してそうではないだろう。二倍かせいぜい三倍までではあるまいか。

弥生時代の初めのころは稲作技術も幼稚であったから、千種川に流れ込む支流がとどこおり、ソウタになった所を選んで稲を作った。今なら機械も入らぬと行ってきらわれるような深田が、最も稲作に適した所だったのである。川は今とちがつて堤防が築かれていたわけではないから、雨が降ると、ほうぼうで何倍もの広さにあふれ、低い所は水がひいた後もソウタが残る。そういう所は遊水地といって、いつでも水をかぶる危険があるけれども、面積はずっと広いので治水技術が進んで来ると稲を作るようになる。更に技術が進むとユデを造って水を引き、アゼを設け乾いた所に水をためて稲を作ることさえできるようになつていく。

その第一段階の場所と思えるのに木地山、中坪、出合、宝谷、山田、時実、新宮、小河など小規模なソウタが考えられる。第二段階としては高保木、仁礼、浅瀬、西河呂一帯、土井久、七野、河崎の窪田などの土器散布地があてられるだろう。

一般的には、放浪に近い生活をしてきた縄文時代の人たちが、移動の際にこわれやすい土器を多く持たず、定住した弥生時代には多くの土器を作るようになったといわれているが、私は少し異った考え方をしている。定住とか移動ということをもぬきにしても、自然からその日、その日の食物をとって生きていた縄文時代には土器をそれほど必要としなかったのだが、生活様式が変り、信仰的にも多様化した弥生時代になれば、貯蔵用の土

器、祭祀用の土器、日常生活の土器など数多くの土器を必要とするようになったことで弥生式土器の破片が多く残っている理由の第一であろう。

散布地の範囲が広がった理由としては、前にいった技術の進歩につれて稲作の適地が変ったことである。また技術の進歩というような長期でなくても、水田が冠水して土砂が多く流れ込めば、土木技術の発達していないこの時代では別のソウタを求めて移動することがもつとも簡単な解決策であった。もちろんそれは居住施設まで移さねばならぬほどの遠距離移動を繰りかえしたというのではなくて、例えば宝谷―山田―新宮―土井久というように手近な耕作地だけの移動もあつただろうし、少し遠距離であれば「出作小屋」を建てて、耕作期間だけ一部の人がそこに住む形もあり時には居住地全体を移動しなければならぬような大水害もあつただろう。その場合は別なソウタを求めて村中が移動したと考えられる。

現代人の常識でいうような私有地の観念はまだなかったから、先に耕作していた者があつたとしても何かの理由で、それを捨てて他に移れば、その跡地はもう誰のものでもなかったはずである。

ユデを作り、あぜを設け、ある程度水田らしい形が整う時代に入つて、はじめて私有地の観念と境界意識が生れたと思われる。私有地といつてもまだ氏族共有地的なもので、現代人の私有

地とはだいぶんちがつた性質を持っている。

それを契機として支配関係が生まれたといってもよいだろう。出自がよく、体力があつて、智略にたけたものが村長となり、隣り合う村々を併呑して勢力をのぼし「原始国家」といわれる部落集合体の王となった。巫祝的才能があつてよく人心を掴み、あるいは惑わし得るものであれば女でも王となることができた。葦原志許乎という豪族が生れたのもこの頃のことである。神戸の伊和地区から出て、宍粟郡を征服し、揖保川ぞいに南下して遂には播磨一国の王となった。

葦原志許乎は出雲の大国主命の別名だともいわれており、伊和の大神（播磨一の宮）と同一人だとか、別人だという論議もあるがこの頃の征服と服属の象徴は、優者の氏神を敗者が受け入れることであつたから、政治的結合は直ちに宗教的結合でもあつた。出雲と播磨に葦原志許乎という共通の人名（神名）があるということは、出雲に服属していたか、連盟的立場の結合があつた可能性を示しているといえよう。

西には吉備津彦を奉ずる吉備の国があり、北のほうには丹波道主によつて治められる丹波の国があつて、事毎に抗争していったと思われるから、互の勢力圏が接する所の弱小部落国家は、風に揺れる草のように、たえず揺れ動いていたことであろう。その頃の日本は百余りの国によつて相争われていたといわれている。

弥生中期のおわり頃から三世紀にかけての日本のことが、中国の史書の中に書かれている。ふつうそれを「魏志倭人伝」という名でよばれており、日本について書かれた最も古い記録として、古代史を語るとき欠すことのできない資料の一つである。その書には日本の風習、服装、産物から中国との外交にいたるまで、比較的くわしく書かれている。それによれば諸国の王をヒコ（ニキ）などというように理解しているのは何々彦という日本人名を中国風に一字だけの名と受けとめたものであろうか、だが副をヒナモリというとき記されているのをみれば、そうとも断定しがたい。大人、下戸、生口など身分をうかがわせるものもある。大人はいわば氏上などにあたるもの、下戸は部民など一般農民のことと思われ、生口は奴婢階層に比定すべきであろうか。

われこそ「王の中の王」になりたいという権政欲で、互に攻めあい、争いあう部族の王たち。人がみな平等で、飢える時には共に飢え、一頭の鹿を得ればムラのものが平等に分けて食つたそのむかしの生活に郷愁のようなものを覚えながら、むくわれることのない生産に従事した下層の人々、その明暗がはつきりと分化してくるのが弥生時代後半の特徴といえるだろう。おそらく、このちくさでも男たちが躰をはって得たシカの毛皮や、女たちの労作である藤布や麻布は、大半が伊和族への貢物として持ち去られたと思われる。

日本の統一

章をまたぐことにはなるが「魏志倭人伝」の記事のうちで、われわれ素人にも理解でき、おもしろいものを二、三引用すると、「大人(身分の高い人)を敬うのに膝をついて柏手をうち頭をさげる」という意味のことが書かれているから、私たちが神社に詣ったと同じことをして敬意を示したと受け取れる。服装については「女は一枚の布に頭を通す穴をあけて被った。男は身体にぐるぐると巻きつけた。」というのがあり、食物のことは「飯を指でつまんで食う」とか「シヨウガやミヨウガがあるが食えることを知らない」というような記事もみられる。また「国の大人は皆四、五婦、下戸も或は二、三婦、婦人は淫せず妒忌せず」という記事もある。

そのような記事が続いたあと、「倭国乱れ、相攻伐して年を歴」にはじまる一連の記載は、日本が卑弥呼を大王として選び、統一への方向に進んだことが読みとれる。ヒミコというのは太陽の巫女という意味だといわれている。

おそらく天照大御神に比される太陽神を崇拝する種族の出か、あるいはその文化を受継ぐ巫女であったのだろう。

「卑弥呼死す。大いに冢を作る、径百余歩葬に殉ずる者、奴婢百余人」という記事は学者の間でも種々論議されており、まだ決定的な説はでないが、この頃から古墳時代とよばれる時期がはじまるのだろう。という大まかな線ではほぼ意見が一

致している。

宍粟郡のうちでも、上野、三方、市場、五十波、金谷など小さいながらも「群集墳」を残している地区もあるが、千種にはそれが無い、ただ荒神橋の西詰と室橋の西側で、工事中に古墳らしいものが破壊され、今は県の遺跡地図に二個のポツポツが空しく印されているにすぎない。



西河内高保木たたら遺跡 (昭和44年発掘)

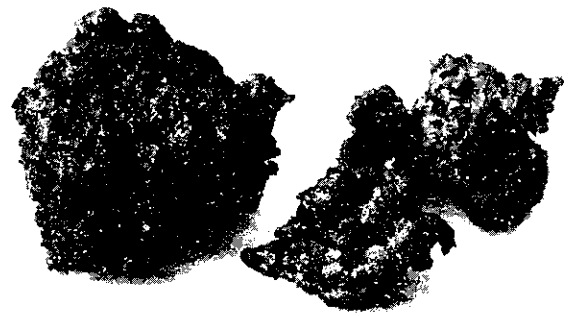
このことは、平地がせまく人口が少なかったので、群集墳を造るほどの豪族が育たなかったと考えるべきであろう。土木技術が進んで、大河川の平地部まで水田化する時代になれば、僻地化するのが当然ともいえる地形なのである。

四、五世紀から徐々に勢力をのびしていった大和朝廷は、文字通り日本の統一を実現し、大陸文化の吸収に一段と努力を重ねていった。官職の制度も中国に倣い、技術や芸術などの摂取にも大童であつたから、渡来人を優遇した、仏教や儒教なども伝えられ、国家としての外見が整うにつれて、中国や朝鮮諸国に比して恥じることのない国史の体裁が要求されたのもあるうか、各氏に伝わる神話や伝承をあつめて、朝廷中心に都合よく書き改められたものが「古事記」であり、「日本書紀」であつた。また各地の産物、地名の由来古老よりの聞き書きを編集してさしだせと命じたのが、今ならさしずめ民俗誌とでもいうべき風土記であつた。

「播磨国風土記」もその命に従つてまとめられたものである。その風土記の中に明記されているように、この時代のちくさは産鉄の村であつたが、いつから製鉄をはじめたかについてはわからない。

千種の製鉄が弥生時代にまでさかのぼると考えたいのは人情であるが、前述の通り古墳時代後半が、考古学的に証明される日本最古の製鉄らしいから、それより古くをのぞむことは無理

であるといえよう。



玉鋼

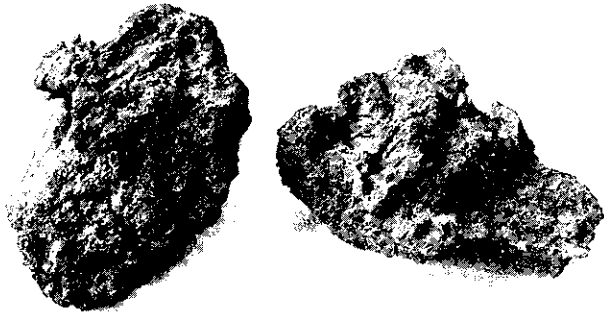
まとめ

私個人の想像を交えながら原始から古代の千種について述べてみた。

千種むかしむかしというような題をかかげておきながら、千種以外のことにあまりにも紙数をとられたのは千種だけがポイントと点のように存在するのでもないし、日本の大きな流れの中

で、片隅の存在ではあっても共に流されて来た先祖の生活を理解するには、やはり日本全体をみなければと思つたからである。大変大掘みで、その上時代も前後したり、文体も稚拙であるが、中学、高校生などこれからの人たちに、郷土の歴史について興味を持ってもらい研究をすすめてもらいたいという私の気持ちを伝えたかったのである。

文化人類学者石田英一郎先生の提案をみじかく、わかりやす



鉄滓 (かなくそ)

く書き、まとめとしたい。

「歴史の学は次の四つの科学が互に助けあい、補ないあつて構成されるべきである。

その一つは歴史学(文献史学)であるが、文字のない時代に

は役にたたず、文字の使用以後も、上層の一部特権階級に史料が集中しているから、大多数の常民階級によつて形成された基層文化の究明には力が弱い。歴史学のもつその欠点を補うのが「民俗学」である。しかし民俗学は現在の常民生活の中に残存する前代の姿を対象とするから、いつの時代からという年代区分を明確にできない弱味がある。個々の民族の生活を比較研究する「民族学」は歴史時代以前にまで遡つて文化発展の跡を知ることができるといふ。けれども民族学は、歴史的事件やその絶対年代を規定できないのは民俗学と同じで、しかも現代につながる民族文化共同体の姿を生々と描きだすことでは民俗学に劣る。地下に埋没した歴史以前の文化財を材料として人類史を復元しようとする「先史考古学」は絶対年代を層位的に実証でき、人の使用した道具に直接語らせることができるが、精神文化上の問題には弱い面がある」

石田氏のいわれる諸科学のほかにも、歴史学の補完に役立つられるものに人類学、言語学、歴史考古学、神話学その他がある。

千種町のような文献史料の少ない農山村にあつては、郷土史の研究には民俗学や考古学などの資料採取が大きな役割りをもっている。明治生れのお年寄りからできるだけ多くの「はなし」をきいておくことも、さしそまつた作業の一つである。